

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題 「現代イスラム知識人の変容と交流」 令和3年度第2回研究会

【共催】

科研費学術変革領域研究 (A) 「思想と戦略が織りなす信頼構築」 (研究代表者: 山根聡 (大阪大学)、課題番号: 20H05828)

科研費基盤研究 (A) 「現代イスラームにおける法源学の復権と政治・経済の新動向: 過激派と対峙する主流派」 (研究代表者: 小杉泰 (立命館大学)、19H00580)

日時 令和3年10月2日土曜日

午後1時～午後3時

場所 Zoomによるオンライン開催

報告

岩倉洸 (AA 研共同研究員、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

「現代アゼルバイジャンにおける公的なイスラム知識人の定義と役割-カフカース・イスラム宗務局の視点から-」

山根聡 (AA 研共同研究員、大阪大学大学院言語文化研究科)

「南アジアの思想潮流とターリバーン」

※公開 (参加者9名)

本研究会では、アゼルバイジャンと南アジアの事例について報告がなされた。

アゼルバイジャン (岩倉報告) については、親政府ウラマー組織であるカフカース・イスラム宗務局を事例に、アゼルバイジャンにおいて公的に想定されるイスラム知識人像についてするものであった。まずイラン、トルコ、アラブ諸国の影響を受けてきたアゼルバイジャンのイスラームについて概要が述べられた後、M. Raoul 等の先行研究におけるイスラム知識人の5層認識 (宗務局、民衆イスラーム、独立イスラーム組織、イスラーム政党、イスラーム近代主義者) を踏まえつつ、現在の政教関係の変化に適用が難しいことや、「近代主義者」が曖昧である点等を指摘した。この上で、宗務局が担った多様な役割 (歴史的な宗教

実践の管理、ムスリム知識人を輩出する教育ルートの確立、宗教・宗派共存及び対テロ等の内外政) について、イスラーム教育のカリキュラムや現在の宗教権威のキャリア形成といった具体的な情報とともに説明された。

南アジア（山根報告）については、まず同地域の思想潮流としてスーフィズム、スーフィズムとヒンドゥー教のシンクレティズム、そして近代以降のデーオバンド学派、バレールヴァー学派、アフレ・ハディースが紹介された。この内、報告はデーバンド学派を中心とし、とりわけパキスタン独立（1947）を経た同国での展開に注目した。具体的には、マウドゥーディー（1903-79）の著書『イスラームにおけるジハード』（1930）が1950年代に翻訳され、これがアフガニスタンに侵攻したソ連との戦いに影響したこと、またパキスタン各地のマドラサ（神学校）分布に見るデーオバンド学派の影響力等を確認し、これが現在アフガニスタンを実効支配するターリバーンの思想的基礎（インド系デーオバンドではなく、パキスタンの、ジハード推奨が興った時代の影響を受けたもの）となっていることを説明した。

質疑応答では、アゼルバイジャンにおける外交チャンネルとしての宗派の役割、またパキスタン系デーオバンドで用いられた『クルアーン』（ペイルート版とされる）の詳細やターリバーン内部におけるムスリム知識人の存在等について議論がなされた。

（了）